ふくしでつながる世代も未来も

Wel-Fes
in SGU

第2回小さな福祉活動実践報告会

発表要旨集

2025年11月1日(土)

四国学院大学社会福祉学部

Wel-Fes2025 in SGU 第2回小さな福祉活動実践報告会 発表題目

11月1日(土) 10:00～12:30

発表番号	時間	題 目	発表者	
001	10:05	市民活動で伝えてきた「ゆるい終活」	木村 奈美	「終活ノオト・きむらなみ」
002	10:20	童話創作という私の居場所	逸見 万葉	やさしいハイヒール
003	10:35	三豊市福祉課の小さな福祉活動報告 「人をつなぐ、福祉課の仕事」	山中 英	三豊市役所健康福祉部福祉課
004	10:50	地域共生社会の実現を目指して	鳥首 咲也香 豊嶋 柚月	四国学院大学専門学校2年課程
005	11:05	ひとり立ちしていく力を育む居場所づくり	山中いづみ	NPO法人 自立援助ホーム
006	11:20	ママの笑顔が地域を変える～ミカママスクールアンサンブルの小さな福祉活動～	上原 美香	ミカママスクールアンサンブル
007	11:35	同性同士でも結婚ができる社会を目指して 。	田 中 昭 全 川 田 有 希	川田中家
008	11:50	精神保健福祉ボランティア「もえぎの会」の活動について	紀伊 博美 久米 章禄	精神保健福祉ボランティア「もえぎの会」
009	12:05	喪失とともに生きるということ～地域全体で考えるグリーフケア, グリーフサポート	秋山美智子	NPO法人グリーフサポートてらすば
12:20～12:30		総括・閉会		

発表は、発表者の入替え時間を含めて1発表につき15分枠(発表12分以内、インタビュー3分)で運営していきます。

市民活動で伝えてきた「ゆるい終活」

木村奈美

終活ノオト・きむらなみ（丸亀市市民活動登録名）

キーワード: 終活　市民活動　地域

1. 活動の趣旨

終活が当たり前の世の中になってほしいと願い、元気なうちに考えることや選択肢を知り主体的に生きるなど、“今をよりよく生きる”ことに気づいてもらえるような活動をしてきた。また、自分の気持ちを言葉にすることによって「心の孤独や孤立」をなくしたい。

2. 活動期間

2019 年～2025 年「ゆるい終活新聞」を制作しコミュニティセンターなどに置く

2022 年～丸亀市マルタスなどで「ゆるい終活の集い」など市民活動

2025 年 7 月、広報まるがめ「エンディングノート特集」される

3. 活動の様子

2019 年から「ゆるい終活新聞」を制作し、近くのコミュニティセンターなどに置いてもらう。(2025 年春、一旦休止)

2022 年丸亀市市民活動登録し、マルタスなどで終活入門講座やもしもの話をする機会となるカードゲーム、ワークショップ、WishList（ウイッシュリスト）を書いてもらい発表するなど多彩なイベントを主催。

縁起でもないと思われる終活が当たり前の世の中になってほしいと願い、全戸配布される広報まるがめ「エンディングノート特集」を丸亀市女性議会で伝えて叶う。

4. 活動成果

元気なうちに考える、自分の気持ちを言葉にする、選択肢を知り主体的に生きるなど、終活は亡くなったあとのことだけではなく“今をよりよく生きる”ことを考える機会と認知されてきた。またエンディングノートを書くことで自分の気持ちと向き合う大切さも時代とともに認知され、現役世代や若い世代も終活をライフプランと捉えて興味を持ってきた。また市民活動や地域・まちづくり、福祉に興味を持つ人との繋がりが増えた。一人ひとりが自分の人生と向き合うことは自助の一歩でもあり、地域や行政の抱える課題をやわらげる地域社会の予防的アプローチにもつながる。

5. 今後の課題と展望

当事者視点の一市民の立場で仕事と家庭の間で活動を続けてきたが、思いだけで活動することの限界を感じている。子どもが不登校ひきこもりになり、より「心の孤独・孤立問題」に課題を持ち、声に出せない思いを言葉にすることで①社会への一歩、②行政や NPO 等へ本当の言葉を届けるなど、持続可能なカタチを作ってみたい。

童話創作という私の居場所

逸見万葉

やさしいハイヒール

キーワード:童話創作活動、多様性の尊重、居場所づくりの輪

1. 活動の趣旨

筆者は肢体不自由当事者である。幼少期より体を動かして遊ぶことが難しいことから、絵本や児童文学に親しんできた。自身が社会人となり童話創作を趣味として始めた。その童話創作活動のつながりの輪を広げたく、今回発表の機会をいただく運びとなった。「やさしいハイヒール」という任意団体名には、筆者の夢である「ハイヒールを履いて街を歩くこと、童話作家になることと、世界がやさしく、平和でありますように、という祈りを重ねて込めている。

2. 活動期間

2024 年春から現在まで

3. 活動の様子

今回の発表を契機として立ち上げた任意団体であるため、まだ具体的な活動の様子を述べる事はできない。しかし、昨年春から 3 作ほどの童話創作をしている。題材は第 1 作目がとうもろこし、第 2 作目が神様、第 3 作目がおかねのなる木、である。今回の発表では、第 2 作目を朗読する。

4. 活動成果

第 2 作目となる『あなた色にこんにちは』は改稿を 70 回以上も重ねた渾身の作品である。ケンカばかりしている神様アムとホンが、老神ティムに促されて「自分の色」を探しに人間界へ旅をする、というストーリーの本作。アムとホンが出逢う人間たち（朱・蒼馬・桃香・翠薫）との交流を通じて、個性とは何か、多様性を尊重するとはどういうことかを筆者なりに描いたつもりである。また、なにより筆者自身が本作の創作を通じて、「童話創作って楽しい」「ライフワークにしたい」という思いを強くした。その意味において童話創作は私の「居場所」といえると考える。

5. 今後の課題と展望

作品の感想をもらうなど、筆者の周囲には少しずつ筆者の活動を応援してくれる人々が増えつつある。しかし、より多くの文筆活動が好きな方々とつながる必要があると考える。また、本作を「アンデルセンのメルヘン大賞」に応募中であり、応募の記念に童話モチーフのブローチを、あるハンドメイド作家さんにオーダーして作っていただいた。そちらも併せて展示しているためご興味のある方は是非ご覧ください。

一緒に、童話創作をしませんか？

私の居場所があなたの居場所になることを願って……

三豊市福祉課の小さな福祉活動報告
「人をつなぐ、福祉課の仕事」

山中　英

（所属・団体名） 三豊市健康福祉部福祉課

キーワード:人をつなげる、人がつながる

1. 活動の趣旨

市民一人ひとりが安心して自分らしく暮らせる地域づくりを目的に、福祉・保健・医療など多分野が連携した包括的な支援を行っています。高齢者、障害者、子ども、生活困窮者など、さまざまな立場の人が抱える課題に対し、相談や訪問を通じて寄り添いながら支援を実施し、地域全体で支え合う仕組みの構築を進めています。

2. 活動期間

平日日中 8:30～17:15

3. 活動の様子

保健師や社会福祉士が地域に出向き、健康・生活・福祉など幅広い相談に応じています。日常の困りごとを早期に発見し、必要に応じて医療機関や地域包括支援センター、民生委員などと連携しながら支援を実施しています。住民に寄り添った支援を通じて、地域全体で支え合う安心な暮らしの実現を目指しています。

4. 活動成果

支援が必要な人への早期対応が進み、孤立の防止や生活の安定につなげています。関係機関との連携が深まり、地域全体で支える体制を構築していきます。今後も継続的な支援と地域連携の強化をすすめていきます。

5. 今後の課題と展望

支援ニーズの多様化に対応するため、地域全体での支援体制づくりが求められます。特に、制度のはざまにある人への支援や、関係機関間の情報共有の強化が重要です。誰もが安心して暮らせる「三豊市」を目指していきます。

地域共生社会の実現を目指して

鳥首　咲也香・豊嶋　柚月

（四国学院大学専門学校・学生ボランティア）

キーワード: 場の提供、人間力の向上、専門学校の役割

1. 活動の趣旨

四国学院大学専門学校 2 年課程の専門学校です。福祉学科で国家資格である介護福祉士の資格取得を目指しながら学生ボランティアとして活動しています。

介護福祉士を養成している学校として

「地域共生社会の実現を目指すために」

①専門学校として求められている役割

②これから社会人として活躍する学生の

人間力向上 ③専門学校の認知度向上などが目的

2. 活動期間

主な活動は、毎月 1 回オレンジかふぇ「おいでまぃ」の開催と随時、行政や自治体、地域や福祉団体などのイベント、事業所や施設行事に参加しています。

3. 活動の様子

内容としては、外出・活躍の場、相談の場、出会いの場として専門職によるサポート、認知症に関する講話、学生による介護予防体操やレクリーション、ボランティアの活躍・発表の場を企画し運営している。カフェをコンセプトにゆっくりとおしゃべりをする時間を設け、学生と一緒にコーヒーやお茶を飲み、お菓子を食べながら身近な話や世間話をしたり、脳トレやトランプ、ゲームなど、各テーブルで好きなことをしながら認知症に関係なく楽しい時間を過ごしています。

4. 活動成果

認知症当事者だけでなく、ご家族や地域住民の方々が一緒に認知症について気軽に話すことができ、認知症について理解を深めるための楽しい場所を提供しており、若い学生が運営していることが他の「オレンジかふぇ」にはない楽しみであり、専門学校に関心を持って下さる方も増えました。

また、学生の①知的能力②社会・対人関係力③自己抑制力が成長できていると感じられるようになりました。

5. 今後の課題と展望

認知度が低いため広報活動を充実させ、活動に賛同して下さる個人や団体などを募り、地域全体で共生社会の実現を目指していく必要があります。

ひとり立ちしていく力を育む居場所づくり

山中いづみ
NPO 法人　自立援助ホーム

自立援助ホームの目的

保護者の不在や養育困難、不適切な養育、虐待、配偶者等による暴力(DV)などによって適切な養育環境を保てず、困難状況におかれているなど、安心して自分をゆだねられる大人がいない青少年たちに、こうした状況の解決や緩和をめざして、住まいの提供、日常生活の相談と援助、生活指導、就学・就労支援などを行い、家庭がない、家庭にいることができない少年・少女たちが「自立すること」を最終目標において生活をする居場所づくりをしている。

自立援助ホームの活動

彼らの意向を尊重したうえで、児童相談所を通じて自立援助ホームへの受け入れを行っている。

入所後は、基本的生活習慣や社会的スキルを身に着ける**生活支援**、メンタル面をサポートし、安心して生活できる環境を提供する**心理的サポート**、自立した生活を送るために、就労や学校との橋渡しを行う**就労・就学支援**、きめ細かい支援を行い自尊心を育むことを重視する**個別支援**の活動を通じて、彼らが自立した生活を送るための基盤を築くことを目指している。

自立援助ホームに必要なこと

自立援助ホームにやってきた青少年たちは、自分で選ぶことができなかった厳しい養育環境をやっとの思いでくぐり抜けてきているため、必然的に否定的な行為を表出してしまうことも多い。自傷や他害を問わず、危険な行為に及ぶ場合もある。自立援助ホームでは、「しつけ」や「指導」を優先するのではなく、彼らの自尊心が育まれる受容的、支持的関わりを中心とした支援を行なわなければならない。

日々の支援には関係者と連携を図り、彼らたちが社会に出てからの暮らしを見通した支援を行うとともに、自立援助ホームを退所したあとも、長くかかわりを持ち続け、帰属意識を持つことができる存在になっていくことが重要である。そのために、スタッフは彼らたちと一緒に生活していく中で日々丁寧な関係作りを心がけている。

ママの笑顔が地域を変える
～ミカママスクールアンサンブルの小さな福祉活動～

上原 美香
（ミカママスクールアンサンブル）

キーワード: 共感・つながり・居場所

1. 活動の趣旨
「ミカママカフェ」は、障害児や発達障害児を育てる保護者が、安心して語り合い、共感し合える“居場所”です。ABA（応用行動分析）の考え方をわかりやすく伝え、家庭でもできる関わり方を学びながら、「食」や「心のケア」も大切にしています。食事で体を整え、ABA で行動を支え、心のケアで安心を育む、三方向からのサポートを続けています。

2. 活動期間
2020 年 4 月に「ママカフェフラット高松」として活動をスタート。2022 年 10 月に「ミカママカフェ」と改称し、2024 年 3 月からは「ミカママスクールアンサンブル」として、音楽や食育を交えた活動へ発展しました。

3. 活動の様子
香川県高松市の国分寺町社会福祉協議会、景色のきれいなカフェ、オンラインなどで開催しています。毎回テーマを決め、「子育ての困りごとあるある」を語り合うおしゃべり会を中心に、食の体験や ABA 的アドバイスも取り入れています。話す・食べる・学ぶを通して、ママたちが笑顔を取り戻し、地域のつながりが広がっています。

4. 活動成果
「この場があってよかった」「同じ経験を持つ人と出会えて救われた」などの声が寄せられています。SNS を通じて全国の保護者ともつながり、香川と愛知など地域を超えた支え合いの輪が生まれています。ABA 的視点と食のレッスンを通じて、ママ自身が“自分を責めない”“子どもの成長を信じられる”ようになり、家庭に笑顔が増えています。

5. 今後の課題と展望
今後は「食育」「ABA」「心のケア」を組み合わせた講座を増やし、全国のママたちとつながるオンライン版を発展させたいです。画面越しでも笑顔で共感し合える“居場所”を広げ、「孤立しない子育て」「つながる福祉」を育てていきます。

同性同士でも
結婚ができる社会を目指して。

川田中家（川田有希＆田中昭全）

①活動の趣旨

2025年現在、世界の39ヶ国で実現している同性同士の結婚（同性婚）を、日本でも法制化してもらうために地道な理解啓発活動を続けている。

川田有希（かわたゆうき）と田中昭全（たなかあきよし）は、戸籍上男性の同性カップル。2008年から香川県三豊市で同棲を続けて、17年間生活を共にしている。ふたりの氏に共通の漢字があり、繋げられることを発見したので冗談めかして「川田中家（かわたなかけ）」を名乗り始めると、友人うちではそれが定着した。地方にありながら、同性カップルであることは広くオープンにしている。

交際12年目となる2019年2月に婚姻届を三豊市に提出したが同性同士という理由で受理されず、それを不服として国を相手取った訴訟を起こした。正式名称を「結婚の自由をすべての人に」と謳った裁判は、札幌・東京・名古屋・大阪・福岡の地方裁判所で複数の同性カップルが原告となり開始した。東京は2021年に2次訴訟も起こり、すべてが現在進行中である。ちなみに川田中家は、大阪での裁判に参加している。

わたしたちが争点にしているのは、同性カップルに婚姻を適用しないのは憲法にある「法の下の平等」に違反するのではないかというところ。賠償請求は却下されても『違憲』という司法判断こそを求めている。

地方裁判所での判決は、大阪以外が「違憲」とされた。高等裁判所での判決は、11月28日に東京2次訴訟の判決が控えているが、今のところすべて「違憲」という結論が出ている。日本の裁判で「違憲」が出ることは極めて稀なところ、ほとんどの裁判所がこう結論付けたということは、かつては存在しないものとして顧みられなかった同性カップルがようやく広く認知されるようになった結果であろう。

わたしたちは上告をして、審理は最高裁判所に移っている。高等裁判所のすべてで「違憲」が言い渡されていることを鑑みるに、最高裁判所で覆ることはまずないと言われている。しかし最後まで油断せず、世論をさらに喚起しつつ挑みたい。

②活動期間

2019年2月14日に提訴したので、今年7年目を数える。裁判以外にも、国会議員に対して理解啓発を訴える「院内集会」や、国会議員に直接会って窮状を訴えるロビイングなどを年間複数回開催している。また、裁判には関わっていないが同じように同性同士で結婚を望む全国の当事者とネットワーク作りなどをして協働している。

③活動成果

地方に暮らしているからこそ、顔も名前も出してメディアの取材なども頻繁に受けてきた。また、わたしたちが婚姻届を出したことにより、三豊市では2020年にパートナーシップ宣誓制度が始まり、市報でのインタビューや三豊市のポスターにも起用された。また、マイノリティへの配慮を訴える企業のキャンペーン広告にもモデルとして起用され、特に田中への講演依頼やアドバイザーとしてのオファーが増えた。

保守的な地域にあってはカミングアウトする当事者も少ない中、日本国憲法が保障する基本的人権をわたしたちも真っ当に享受できるべきであると訴え表に立ったことで、同性婚を望む当事者の可視化に繋げられたのではないかと自負している。

⑤今後の課題と展望

最高裁判所の判決は来年になると思われる。それまでにも、世論を喚起するため真摯な理解啓発運動を続けるつもりである。またたちまち、審理に向けて再び陳述書を書き下ろすことになっている。

提訴からの6年で新たに感じたことなどをすっかり言語化したい。

精神保健福祉ボランティア「もえぎの会」の活動について

紀伊　博美・久米　章禄

(精神保健福祉ボランティア「もえぎの会」)

キーワード:精神障がい者支援、地域に根ざした活動、モットーは普通のおじさん・おばさん

1. 活動の趣旨

こころの病は特別な人がかかるものではなく、だれもがかかる可能性がある病気です。こころの病気があるということで生きづらさを抱えながら生活をされている方々がいます。

そういう方たちと共に、住み慣れた地域で生き生きと暮らすことができるように活動を続けていきたいと思っています。

2. 活動期間

平成 8 年に丸亀保健所（現中讃保健福祉事務所）主催の精神保健福祉ボランティア講座をきっかけに「こころのボランティア」として活動を始め、平成 10 年からグループ名を「もえぎの会」として本格的なボランティア活動を始め、現在の会員数 33 名。

3. 活動の様子

・定例会（月 1 回）

・機関紙発行（毎月）

・関係機関への支援

・地域への普及啓発

・研修旅行（毎年）

・その他

4. 活動成果

地域に住む精神障がい者に寄り添うことが出来ている。

5. 今後の課題と展望

会員の高齢化により現状のボランティア活動を維持することが困難になってきている。

喪失とともに生きるということ～地域全体で考えるグリーフケア，グリーフサポート

（特定非営利活動法人グリーフサポートてらすば　代表理事　秋山美智子）

グリーフケア，グリーフサポート，大切な存在を失ったあなたへ

1．活動の趣旨

大切な人やものをなくしたとき，一人で抱え込んだり，専門職だけがその痛みを支えるのではなく，地域全体でサポートがある社会（コンパッション・コミュニティ）を醸成するために活動をしています。死別やさまざまな喪失を経験した当事者が，多様な表現（言語，非言語とも）を用いて思いを表す場を地域に提供し，グリーフ[1)]への社会的理解の促進とサポート体制の構築を図っています。当事者や支援者，地域住民が相互に支え合いながら，「誰もがグリーフを大切に抱えながら生きやすい社会」を目指しています。

1）大切な人，ものなどを失うことによって生じるその人なりの自然な反応，感情，プロセスのこと

2．活動期間・頻度・様子

①啓発イベント（毎年 10 月）

流産・死産等で赤ちゃんを亡くされた方のキャンドルナイトを主催。手紙の展示や灯をともし，想いを寄せる時間を提供

②きょうだいたちのグリーフワーク

亡くなった兄弟姉妹を持つ子どもたちが，安心して非言語表現できる場を開催

③講演・研修の実施（随時）

医療者や福祉職，行政職員，学生向けにグリーフケアに関する学びを提供

④個別サポート（毎月）

分かち合いの会や個別相談を実施

3．活動成果（定性的：分かち合いの会参加者，ボランティアの声）

・安心して悲しみを語れる場ができた。同じ経験を持つ人と出会えて，ひとりじゃないと思えた。気持ちの浮き沈みが激しくおかしくなったと思っていたけど，グリーフの知識を知ってほっとした（死別当事者）

・グリーフの視点や事例を知り，今後の支援にいかしたいと思った（医療者）

・初めて知ることばかりで，死や喪失への偏見に気づいた（大学生ボランティア）

・将来医療者になった時に，この学びや体験が必ず活かすことができると感じた。学生の内に経験できたのは貴重（高校生ボランティア）

といった声が寄せられています。

行政や医療，NPO との協働も始まり，地域福祉へのインパクトが少しずつ広がりつあります。

4．今後の課題と展望

グリーフサポートの担い手不足です。誰もが経験する喪失について，当たり前に支援先やグリーフの基本的知識，情報を手に取ることができるように，次世代や地域住民もともに考え，医療・福祉・行政・地域で互いに支え合う暮らしを願っています。

・当事者支援の継続性（資金・人材）

・グリーフに対する社会的理解の不足

・学生や専門職との協働による体制拡充

・痛みを表現する文化を地域に広げる啓発